日中漢語語基の比較

荒川清秀

キーワード：日中同形語，漢語，語基，造語力，日中語彙交流

要　旨

日中共通の漢語語彙，いわゆる「日中同形語」を比較する際，単に複合語全体の意味を考えるだけでは不十分で，構成要素（語基）の意味や語構成，さらにはその語の成立のメカニズムにまでたちいって考える必要がある。本稿では，まず，漢語語基が両言語でもつ重み，各言語体系の中でしめる位置，両国語で独自に発達した漢語語基，語基の自立性と造語力の関係を問題にし，さらに両言語の語彙体系にみられる他言語の漢語語基の混入についてみてみたい。

0　はじめに

「晩餐」「視線」「起床」「空軍」「盆地」「引力」といった，2字漢語を中心とする「日中同形語」の研究は，文体，文法性の違い等を含め，これまでかなりの研究が行われてきた。しかし，共時的なレベルでの研究には限界がある。荒川（1997）は，「日中同形語」研究を進展させる試みのひとつとして，日中共通の漢語を歴史的に問題にしたものである。その際，きっかけとなったのは，2字漢語を構成する語基の意味の差であった。たとえば，荒川（1987）で「熱帯」をとりあげたのは，「熱」を含む漢語の中での「熱帯」の異質性にひっかかったからである。荒川（1988）でとりあげた「回帰線」も，日本語としては「めぐり（まわり）帰る線」であるが，中国語では現代語のカエルである“回”と古典語のカエルである“帰”があわさった並列の複合語で構造が違っていた。これらは，日中での漢語語彙を比較するときに，単に複合語全体の意味を考えるだけでは不十分で，構成要素の意味や語構成，さらにはその語の成立のメカニズムにまでたちいって考える必要があることを示唆している。

周知のように，日本語における漢字は漢語の表記だけでなく和語の表記にも用いられる。その結果，和語の表記に用いられる漢字が，日本語における漢字の意味を複雑にし，造語にまで影響をおよぼすことがある。そうした問題も以下ではおりにふれ言及するが，考察の中心は漢字表記語ではなく漢語語基そのものにあることをことわっておきたい。

さて，本稿では，日中での漢語語基がそれぞれの言語でしめる位置，中国あるいは日本で独自に発達した意味，用法，造語力を問題にするとともに，両言語の語彙体系にみられる他言語の漢語語基の混入についてみてみたい。実際，日本語，中国語の漢語の語構成や造語力を論じる場合に，他方からの流入を無視して論じることはできないからである。[注1] 基本的資料としては以下のものを利用した。

A　国立国語研究所 1962『現代雑誌 90 種の用語・用字(2)漢字表』秀英出版
B　国立国語研究所 1976『現代新聞の漢字』秀英出版
C　北原保雄編 1990『日本語逆引き辞典』大修館書店
D　『日本国語大辞典　第二版』小学館（→『日国』と略す）
E　1982『常用構詞字典』中国人民大学出版社
F　1985『新法編排漢語詞典』新華出版社
G　上野恵司・相原茂 1982『逆引き中国語辞典』日外アソシエーツ
H　国家語言文字工作委員会 1992『現代漢語字頻統計表』語文出版社

なお，以下中国語を特に区別するときは“　”で，意味概念を表すときはカタカナあるいは〈　〉を用いる。

1　漢語語基の重み——のべと異なり

日中両国語には，一見意味の等しい漢語語基が多く存在するが，それらが両国語で占めている位置，重みは必ずしも同じではない。

重みを測る一つの尺度は，それぞれの漢語語基がつくる複合語の数（異なり語数）である。たとえば，「晩餐」は日中で共通の漢語であるが，その中の「餐」についていえば，日本語では，

晩餐　正餐　午餐

等，「餐」を含む複合語はあまり多くないし，これら自体も使われる場はかなり限られている。しかし，中国語では，「動＋餐」の動客構造に，

会餐　进餐　就餐　聚餐

等があるほか，「□＋餐」の修飾構造の語に，

快餐　早餐　午餐　晚餐　中餐（中華）西餐（洋食）日餐　素餐　野餐　聖餐

があり，「餐＋名」の修飾構造にも，

餐具（食器）　餐巾（ナプキン）　餐庁（レストラン）

がある。「□＋餐」の修飾構造の語が特に多いことに注目してほしい。“餐”を含む語は，文体的にやや硬いとはいえ，ファーストフードも“快餐”と“餐”でつくっている。「餐」という漢語語基が両国語にあるにしても，その重みは違うといわなくてはならない。

重みをはかるもう一つの尺度は頻度数（延べ語数）である。両国語での「餐」の異なり語数の違いは，同時に頻度数の差でもあるが，「餐」では頻度が低すぎてくらべるのが難

しい(資料Bでは9以下)。ここでは，類義的な語基のグループを問題にしてみたい。たとえば，「睡」「眠」「寝」は日中どちらでも使われている「漢字」で，日本語では，

		寝	眠	睡
『新聞の漢字』	(頻度)	124	75	20
	(熟語数)	5	7	4
『雑誌90種』	(頻度)	110	36	10
	(熟語数)	5	3	3

のように，2種の統計では，頻度数においても異なり(熟語数)においても「寝」が「睡」を上まわっている。しかし，中国語では，

		睡	眠	寝
『現代漢語頻率詞典』	(頻度)	1127	290	92
『構詞字典』	(熟語数)	22	9	5

のように，順序が逆転する。ただ，日本語では和語の表記に用いられたものも含まれているから，漢語語基にあてられたものに限るとつぎのようになる(資料Bによる。固有名等特殊なものは省く。数字の左は延べ，右は異なり)。

寝　28/5　寝具　寝室　寝台　就寝　不寝(番)
眠　23/7　安眠　仮眠　快眠　催眠　春眠　睡眠　不眠
睡　19/4　睡眠　一睡　昏睡　熟睡

語基に限っても「睡」の使用が少ないことは変わらない。これに対し，中国語の“睡”の頻度の高さは，あとで述べるように，“睡”が自立性の語基で，単独であるいはなんらかの補語を伴って用いられるほか，複合語の数が多いためである。

2　語彙の体系の中での漢語語基

中国語では，いわばすべてが漢語語基であるのに対し，日本語では，漢語語基は和語や外来語とのはりあいの中で存在している。先に「餐」の日中での異なり語数が大きく違うことをみたが，これはすなわち，「餐」が各言語の語彙体系の中で占めている位置が違うことを意味する。たとえば，日本語で〈食事〉を意味する語基としては「餐」以外にも，「食(ショク)」「飯(ハン)」「ご飯(ハン)」，和語の「めし」，外来語の「フード」が存在し，これらでこの分野をまかなっているからである。以下をご覧いただきたい。

食　外食　軽食　菜食　定食　主食　昼食　朝食　副食　間食　夜食　夕食
　　洋食　和食　立食　日本食　宇宙食　自然食　離乳食
飯　夕飯　朝飯
ご飯　朝ご飯　昼ご飯　晩ご飯　夕ご飯
めし　夕飯　朝飯　早飯　昼飯　晩飯
　　牛飯　五目飯　混ぜ飯　菜飯　釜飯　栗飯　握り飯　麦飯　焼き飯

フード　ベビーフード　ファーストフード

これをみると，一日の3度の食事以外では，「食」の造語力が高い[注2]。日本語での「餐」の重みの小ささはこのような語彙体系の中での位置からきているのである。

3　日本で発達した漢語語基

2字漢語が和製か中国製かで問題になることがあるが，ある語基を含む一連の語が和製と判断できる場合がある。たとえば，

済　弁済　全済　返済　皆済　完済　決済　内済　半済

配　配送　配達　遅配　宅配　配給

などの複合語は本来の中国語からは出てこない。これは「済」や「配」が「済む」「配る」という和語表記を経ることで意味がずれ，それが和製漢語をつくる原因になったものである[注3]。

筆者もこの問題についてはかねてから注目していたが（荒川1986 a），ここで指摘したいことは，「訓」と古代中国語の意味のずれが，日本語において新たな語基を創造する場合とそうでない場合があることである。たとえば，「催（もよおす）」は「眠気を催す」のように使うのが本来の用法で，「催眠　催涙（弾）」はこの意味に基づく複合語であるが，「謝恩会を催す」のような使用は，「もよほす」という和語が多義であるために生じたものである。しかも，この「訓」は漢字を介して「音」に返すことで語基を生み，つぎのようにいくつもの複合語をつくりだした。

主催　催行　共催　開催

日本語の中の漢字は，このように和語の表記に用いられることで，中国語とは別の漢語語基をつくってしまうことがある。しかし，訓と漢字の意味とのずれが，つねに複合語を作り出すわけではない。たとえば，多義語「たづさふ・たづさはる」にあてられた「携」は，本来そのうちの「携帯する」という意味にだけ対応していたが，「たづさふ」という和語が多義であることから，「（なにかに）たずさわる」という場合にも使われるようになり，その結果，日本語における漢字「携」に〈従事する〉という意味を付与することになった。しかし，「（なにかに）たずさわる」の方の「携」は漢語語基をつくらなかった[注4]。

「盛」という漢字は本来「もる」と「さかん」という意味をもっていた。しかし，漢語語基「盛」には，〈盛ん〉という意味をもつものはあるが，モルという意味を含むものはない。これはあとでも述べるが，モルという意味での中国語動詞“盛”が修飾構造の複合語をつくりにくかったからである。

日本語において，和語の表記に用いられる漢字（訓）と，漢語語基の表記に用いられる漢字（音）は，これまで述べてきたように，関わりはあるもののそれぞれが独自の体系をつくっている。たとえば，「内（ナイ）」と「中（チュウ）」はそれぞれ「うち」「なか」という訓をもって

いるが，「～のなか」という複合語をつくるときには，

園内　円内　学内　校内　館内　店内　車内　社内　室内　屋内　家庭内　教室内

のように，訓では「うち」である「内（ナイ）」が使われる（荒川 1986 b，pp. 18—20）。また，

養　養豚　養鶏　養魚　養蚕

における，訓としての「やしなう」と漢語語基の意味である〈飼ウ〉とのずれは，輿水（1987）で早くから指摘されているが，これも日本語において「音」と「訓」がかかわりをもちつつも，別の体系をつくっていると考えれば理解がしやすい[注5]

4　自立性語基と非自立性語基の造語力

漢語語基の造語力というのは，自立性語基か非自立性語基かで，違いがあるのだろうか。かつて荒川（1981）でとりあげた「服・衣・装」でみると，自立性語基の「服」が多くの複合語をつくっていた。しかし，1であげた中国語の“餐”や日本語の「食」はともに非自立性語基でありながら造語力は高い。野村（1978）p. 122 でも，

肉⇔魚　市⇔村　劇⇔歌　本⇔書　愛⇔心　点⇔値

のような例をあげ，語構成能力において，自立性語基と非自立性語基にほとんど差がないことを指摘している。ところで，以上あげたものは，すべて体言（性）語基である。そこで，ここでは中国語の漢語語基を中心に，語基の自立性，品詞性が造語力とどのようにかかわっているかをみておきたい。

4・1・1　動詞性語基「睡」「眠」「寝」

上でみたように，日本語では，頻度では「寝＞眠＞睡」，複合語の数では「眠＞寝＞睡」の順であったが，中国語では，

睡　睡魔　睡眠　睡衣　睡相　睡帽　睡眼　睡覚　睡意　睡夢/昏睡　午睡　熟睡

眠　安眠　長眠　成眠　催眠　冬眠　夏眠　失眠　睡眠　休眠　永眠

寝　寝車　寝具　寝室　安寝/就寝

のように，日本語とは逆に，自立性語基である“睡”の造語力がもっとも高い。ただ，“睡”は〈ねむる（ときの）～〉という修飾用法が中心だが，これは陳（2001）p. 199 が言うように，“睡”が自動詞であることとかかわっているだろう。一方，名詞としての〈眠り〉というときは“眠”という非自立性語基が使われている[注6]。

4・1・2　「看」「視」

古代中国語においてミルを表す基本的な語は“視”であるが，現代中国語では“看”である[注7]。ネルでは，自立性語基“睡”の造語力が高かったが，ミルでは，

看法（見方）　看頭（看る価値）　看台（観覧席）

のように，修飾構造において自立性語基“看”はあまり複合語をつくっていない。これは“看”が他動詞であることと関係がある。ところが，“視”は非自立性語基であるが，修飾構造の「視＋名詞」では多くの複合語をつくっている。

視差　視角　視覚　視力　視線　視点　視野

「ある方式でミル（こと，もの）」場合にも使われる。

電視　透視　近視　遠視

この語構成による複合語は多い。今，日本語もあわせあげる。

中国語のみ　小視　仇視　平視　掃視　自視　診視　環視　審視　岐視　怒視　珍視
省視　探視　逼視　短視　鄙視

日中共通　無視　正視　巡視　坐視　注視　重視　軽視　監視　敵視　検視　蔑視
凝視

日本語のみ　直視　黙視　異端視　過大視　同一視　等閑視　度外視　白眼視

このタイプでは，日本語の「視」の方が□□視のような3字漢語もつくっていて，造語力が高い[注8]。「視」の造語力が高い理由については，5でふれる。

4・1・3　形容詞性語基「快」「速」

日本語の「快速（電車）」は「こころよいほど速い」という意味で，「快足」に限って「快」はハヤイという意味になるが，中国語の“快”は〈（スピードが）はやい〉で，“快速”はハヤイという古今義をもつ語基が並列の関係で複合したものである。今，現代中国語で，“快”と“速”のつくる複合語をみると，自立性のハヤイである“快”は「はやい＋名詞」に，非自立性の“速”はその多くが「はやく＋動詞」という構造に使われ，両者の間で分業が行われている。

快報　快餐　快車（急行）　快門（シャッター）　快艇　快信（速達）　快手
速記　速決　速溶　速算　速写/速効　速度

“□速”は中国語でも“速度”の略がほとんどである。

光速　音速　風速　失速　加速

ここでは，自立性語基の方が連体修飾用法に用いられる傾向が強いといえそうだ。

4・1・4　名詞性語基「牙」「歯」，「天」「空」

上で述べたように，名詞性語基においては，造語力は語基の自立非自立に左右されない傾向がある。今，現代中国語で〈歯〉を意味する非自立性語基“歯”と自立性語基“牙”がつくる複合語についてみると，

牙　門牙　犬牙　奶牙　虎牙　恒牙　智牙　槽牙　虫牙　仮牙
門歯　犬歯　乳歯　恒歯　智歯　臼歯　齲歯　義歯

のように，ほとんど対応するものをもっていて，違いは文体的なものだけということになる。ただし，比喩的な“鋸歯”（鋸の歯）“輪歯”（歯車）は“歯”が使われている。

非自立，自立のペアからなる類義的な語基が，複合語をつくる際に意味分野を棲み分けている例もある。現代中国語で，〈空〉の意味をもつ自立性語基は“天”であり，“空”は複合語の中でのみ〈空〉の意味を実現するにすぎない。今，〈空〉の意味をもつ複合語を並べるとつぎのようになる。

天　上天　蒼天　藍天　変天　航天　通天　翻天　露天
天橋（陸橋，平均台）　天梯（高い建物にとりつけた梯子）　天線（アンテナ）
天車（天井クレーン）　天溝（とい）　天井（天窓）　天棚（アンペラ屋根）
空　空際　空間　空降　空姐　空軍　空難　空勤　空襲　空域　空運　空中　空姐
上空　天空　太空　長空　防空　星空　凌空　航空　高空　領空　晴空

“天橋”以下は中国語の“天”に独特のもので，地面から少し離れたところ（空中）から，はてしない宇宙までを指す。これに対し“空”を含む複合語は主に近代用語で，“天”の両端の間，航空機の飛ぶ範囲にかかわるものが多い。“天”が“空”を包括しているといえる。また，“航空”に対し，宇宙空間の飛行には，“航天”が使われる。

5　漢語語基の意味，造語力の歴史性

5・1　漢語語基の意味の歴史性

5・1・1　「足」と「脚」

漢字音がいろんな時代にまたがっているように，日本と中国の漢語語基の意味も時代によって変化し，独自の意味発展，語彙の拡大をとげている。さらには，他言語の中に紛れ込み，そこでの語彙体系に影響をあたえることがある。ただし，漢語は意味を音の中に塗り込めるといわれるように，一旦できあがった漢語は要素の意味が自覚されにくい。ここでは，日中漢語語基を比較する場合に，歴史的な観点が不可欠であることを述べてみたい。

たとえば，古代中国語では“足”は英語で言う foot あるいは leg を指し，“脚”の方は，最初「脛（膝から下）」（『説文』四篇下　段注）の部分を指し，それがのちせばまって，唐代にはほぼ現代語と同じ foot の部分を指すようになった[注9]。現代中国語についてみると，

脚歩　脚尖（つまさき）　脚印（足跡）　手脚（手足）

は純粋に foot の例。

墻脚（塀の下の部分）　山脚（山裾）　袴脚（ズボンの裾）

は，転義だが，foot の派生であることがわかる。しかし，

脚力　雨脚　三脚架

の“脚力”は下肢全体で，“雨脚”はその転義であろう[補注1]。『漢語大詞典』によれば，前者は宋代，後者は六朝から用例があり，“雨脚”は杜甫も使っている。これらは，古代語の“脚”からきているのだろう。ちなみに，広東方言では“脚”が leg の意味で使われている（北京大学『漢語方言詞彙』）。“三脚架”については後述。

一方，日本語では，

足　義足　土足　俊足　短足　豚足　蛇足　扁平足
脚　O脚　X脚　脚線美　美脚　橋脚　三脚　脚力　脚注　馬脚

からわかるように，漢語語基としては，「足（ソク）」は foot でも leg でもあるが，「脚（キャク）」はむしろ leg を指している。中国語とはまったく逆の意味変化をしたわけである。なお，「美脚」は動客，修飾両方の構造がある。

ところで，日本語での複合語のうち，「脚注」は，footnote の訳語だとすれば，foot＝“脚”となる言語，すなわち中国語で生まれたことになる。逆に，“三脚架”は日本語から入ったと考えると説明がしやすい。日本語では「三脚」とも略されるが，中国語では“架”（ささえ）がなければ，みっつの foot では意味をなさないからである。[注10]

5・1・2 「床」

「床」は，中国語ではもともと「腰掛け」と「ベッド」を兼ねていたが，のちベッドだけの意味になった。[注11]「ベッド」と「とこ」の用途は同じで，

袖珍 1862 clinic, clinical 床ニ付テ居ル

Lob 1866 clinic, clinical 床的（ベッドの）

のように，ともに同じ漢字を使いながら，意味するところが違うのは感慨深くさえある。以下この微妙なずれと造語のかかわりについてみてみたい。

ずれといえば，中国語では，

車床　機床　衝床　剪床　磨床

のように，“床”が近代に「工作機械の台」の意味でも使われるようになった。“車床”は「旋盤」のことで，“車”はここでは「刻む」という意味である。“車床”の初出は Morrison 1822 にまで遡ることができる。[注12]

「床」は，これ以外では日中共通なものがかなりある。

共通　（苗床）　病床　温床　河床　岩床　鉱床　臨床

日本　銃床　視床

「病床（ビョウショウ）」は「やまいのとこ」をおそらく音に返したもので，「すでに病人が寝ている床」であるのに対し，中国語の“病床”は「病人が寝る予定のベッド」で違いがある。これに対し「苗床（なえどこ）」は音に返さなかったから，一見，比較の対象にならないが，「ほしぞら」→“星空”（中国語）のような，一方が和語で，他が漢語であるようなペアの存在は日中比較語彙論のひとつの対象であろう。

「河床（カショウ）」ももとは「かわどこ」からきていて，本来「川床」という漢字が当てられていたが，音に返すにあたり，「川」にかわって「河」を用い「河床」となったものと考えられる。『地学字彙』1914 には「river bed 河床」とある。これは，

川　河川　山川

河　山河　銀河　大河　氷河　運河

のように，漢語語基の「川（セン）」には，類推のモデルがなかったので，「河（カ）」の方をあてたものだろう。この点，日本語から入った「氷河」を廃し「氷川」を採用した中国語とは対照的である。[注13]「河床」や「温床」は，river bed，hot bed の訳語として，おそらくは日本

でできたものであるが，これは「とこ」と bed がともに転義をもち，それがほぼ一致したということにもなる。[注14]

5・1・3 「視」と「看」

「ミル～」で“視”が使われる例を 4 であげたが，「動詞＋名詞」の修飾構造の語は中国語では本来非生産的なものといわれる。[注15] 現に上にあげた語はすべて日本語と共通であるが，これらは，『日国』によれば，

視差 1798『暦象新書』/視覚 1855『和蘭字彙』/視角 1851『気海観瀾広義』/視力 1872『医語類聚』/視線 1867『新精眼科新書』/視点 1928/視野 1910

のように，そのほとんどが江戸時代につくられている。日本人が古代中国語でミルを表す基本的な語“視”を用い，日本的な造語法にしたがってつくったといえる。[注16]

5・1・4 「天」と「空」

先に，現代中国語では“天”と“空”が複合語の意味分野を棲み分け，近代概念を表す語が主に“空”によってつくられていることを述べた。そもそも，“空”は本来中国語では「からっぽの」という意味であり，〈空〉の意味で使われる場合も“空中”あるいは“太空”という形をとっていた。たとえば，近代に来華した西洋人宣教師がつくった辞書には，

Morri 1822　sky 蒼天　天　　/air 気　地気　up in the air 在空中
Lob　1866　sky 天　　空中　/air above in the sky 空中
Dooli 1872　sky 天　　空中　/air 気　地気

のように“空中”としてしか出てこない。air なり sky が“空”になるのは一定の過程を必要としたのである。そして，それに関わったのは日本人であったと考えられる。

「海軍」は江戸（『和蘭字彙』），「陸軍」は明治初期から存在するが，「空軍」に『日国』は 1936 年というおそい例を挙げている。これは，陸海軍がともに「航空隊」をもち「空軍」そのものを持たなかったからでもある。[注17] ところで，『日国』が引く『新しいことばの字引』1918 には，

航空隊　飛行機・飛行船を以て組織された空中軍隊の意味

と出ている。ここで「空中軍隊」とあるのに注意したい。「空軍」はこの略称と考えるとわかりやすい。つまり，「空＝そら」が成立する日本語でも，訓を返してすぐさま「空（クウ）」にならなかったのではないか。むしろ，『研究社英和』1935 に「airraid 空中襲撃　空襲」とあるように，「空襲」は「空中襲撃」の略称としてできたと考える方が合理的だ。「空戦」も「空中戦」の略と考えるとわかりやすい。

ところで，「空港」の成立はどう考えればいいのだろう。「空港」は訓から音への変換（空の港→くうこう），あるいは蘭学以来の伝統である「air（空）＋port（港）」の訳語法と一致するが，訓を音に返すという方法はつねに有効であるわけではない。『井上新英和』1915 には「飛行機飛揚場」としかなく，『研究社和英』1931 になってようやく「空港」

が現れるが（『日国』の初出例は1932年），『研究社英和』1935に，「airport 航空港　航空機着陸地」とあるのがここではヒントになる。つまり，「航空港」の略称として「空港」ができたと考えることもできるのである。

一方，中国語では，『英華日用』1915以来「aerodrome 飛機場」が使われ[注18]，これが現在につながり（今日では“機場”と略称する），日本語の「空港」を入れなかった。『総合英漢』1927には「空中襲撃」があるが「空襲」はない。『総合英漢』は井上をはじめ日本の英和辞書から訳語を多くとったと言われているが[注19]，「空襲」と略称するにはまだ抵抗があったのであろう。『増訂総合英漢』1948も「空中襲撃」のままである。

5・2　造語力の歴史性

中国での造語をみていくと，同じ原語をふまえながら，日本人とは違う語基を用いていることがある。たとえば，「引力」ということばは江戸時代，オランダ語の aantrekking-skracht を逐語訳してつくられたのだが，中国語では，英語 attraction に，

牽引之力　（『Dooli』1872）
摂力　（『談天』1874）
吸力　（『六合叢談』1857）

等の訳語をあてた。なぜ，似た原語にちがった語基があてられるのか。

attraction とは「引き寄せる」ことで，その意味では中国訳も原語の意味に忠実なのだが，用いる語基が分かれたのは，それらの語基が日中でもつ造語力の差のためである。すなわち，日本ではヒクから容易に「引」が出てくるが，中国語では，ヒクといえば“牽”や“拉”が浮かぶ。逆に“引”は非自立性の語基であり，中国語としては抽象化がすすんで，複合語をつくる場合も「導入する，参考にする，案内する」といった意味で用いられるのがふつうである。“摂”は古代漢語では〈引く〉という意味で，“磁石摂鉄”のような例がある。こういう古代漢語の知識が“摂力”を生んだのだろう。なんにせよ，中国語では〈引く〉からたちまち“引”が出てくるわけではないのである。ただし，「引力」は中国語にも入った。したがって，中国語の“引”を含む複合語を問題にする場合には，以上のような事情を考慮する必要がある。

注1　荒川（2000）でとりあげた「健康」は，中国語の造語法としては例外のひとつとされていたものである。

注2　石毛直道は，「外食文化のフォーラム」で，外食に対する「内食（うちしょく）」，もちかえりの「中食（なかしょく）」という業界用語を紹介している（田村・石毛編（1993））。なお，中国語の“飯”や“食”も複合語をつくっていないわけではなく，“飯”は3度の食事，“食”はそれ以外の食べ物全般をおおっている。

飯　早飯　午飯　中飯　晩飯　便飯　客飯　分飯
食　夥食　冷食　零食　面食　素食　主食　副食

注3　陳力衛（2001）pp. 69—76。輿水（1987）も，日本人中国語学習者は，中国語の“配”をみても「配る」という訓に引きずられやすいと述べている。

注4　「おぼゆ」も「めまいを覚える」「空腹を覚える」などに使われるのが本来の用法であって，「（単語を）覚える」の「覚える」は本来の「覚（カク）」がもっていた意味ではない。後者も漢語語基を生み出さなかった。

注5　音と訓のずれについては，Suzuki（1963）がつとに「寒い」と「寒流」との矛盾を指摘していた。荒川（1986 b），荒川（1997）pp. 155—156 も参照。

注6　中国語の〈泳ぐ〉は“游”であるが，〈〜泳ぎ〉という時は，“側泳　電泳　蝶泳　爬泳　潜泳　蛙泳　仰泳”のように，非自立性語基である“泳”の方が使われる。

注7　橋本萬太郎も言うように，現代中国語ではミルは基本的に“看”一つで，病気をミル場合にも“看”が使われる（橋本他（1987）p. 87）。中国語ではミルにいくつもあるということがときに言われるが，これは歴史的な観点を欠いたものである。

注8　中国語の“看”を後要素にもつ複合語は，つぎのように前の語基が後の“看”を修飾して，その意味範囲を限定するものが多い。このタイプは日本語にはない。

　　小看　観看　試看　参看　査看　照看　察看　踏看

注9　伊藤東涯『操觚字訣』巻10には「脚ハ，アシノハギ也，ヒザノ下，カウノカミマデヲイフ」とある。黄金貴（1995）pp. 552—556 には多くの例をのせていて参考になる。

注10　『日国』には「脚注」の例として谷崎1928年の例をあげるが，中国では，顔1908“頁脚注”，Hem 1916 “註脚”，総合英漢1927 “脚註”と出ている。一方，顔1908には“三足架”“三脚架”ともにあるが，Hem 1916 tripod には“三条腿的架子”と leg を意味する“腿”で説明する。『漢語大詞典』（12-p. 776）では“露出馬脚”（馬脚を現す）の“脚”を foot の意味項目に入れている。

注11　『釈名』（釈床帳）にある「人所坐臥曰床」が要領を得ている。黄金貴（1995）pp. 1093—1096 参照。日本語の「ゆか」はベッドとは大きなへだたりがある。

注12　「旋盤」の原語，lathe からは語源がたどりにくい。オランダ語 draaibank やドイツ語 drehbank では「まわすベンチ，腰掛け」の意。袖珍1862には「鏇盤（ロクロバン）」とあり，ヘボンは初版〜3版「rokuro」。『日国』によれば「旋盤」の初出は工学字彙1886。なお，「盤」と「盆」については荒川（1998）で比較をこころみた。

注13　「氷川」については，「日本と中国で訳語が分かれるとき—「氷河」「氷川」など」と題して報告したことがある。（2001年2月23日　国立国語研究所）

注14　『英和和英地学字彙』（1914）には，岩床　flat of ore, sheet, sill/鉱床　ore deposit とあり，「鉱床」は『日国』に『朝野新聞』1893の例がある。これらも日中共通であるが成立過程は不明。「銃床」の「床」は銃身をささえるフレーム。『日国』には『五国対照兵語字書』1881（西周）monture dun fusil（ささえ）の例をあげる。「床」を「ささえ」という意味でも理解していたことがわかる。「視床（下部）」も日本独自のものだが，成立の過程は不明。

注15　中国語において修飾構造の「動＋名」が少ないということは，沈国威1990や陳力衛（2001）p. 199 に指摘がある。

注16　荒川（1998）でとりあげた，日本人の手になる「盆地」の「盆」も，日本語化した浅いトレイの「盆」ではなく，中国語本来の「覆水盆に返る」の「盆 basin」である。日本人が造語をする場合に，日中での漢語語基の意味の差を自覚した例といえる。

注 17　「海軍」は『和蘭字彙』1855 に zeekrijg の訳語として出てくる（同書には「zeegevegt 海戦」もある）。〈陸軍〉にあたると考えられる army は「軍勢」で，ヘボン『和英語林集成』は 3 版までこの訳語を採用しているが，明治政府が兵部省を廃し陸海 2 省を設立したのは 5 年（1872）であるから，「陸軍」という語はこれ以前からあったと思われる。中国側資料では Lob 1866 には「navy 一国之兵船」としかなく，顔 1908 に「陸軍」と並んで「海軍　水師」と出てくる。

注 18　HANDBOOK 1917 aerodrome 飛機場/NEW TERMS 1932 aerodrome 飛機場/『双解実用英漢』1935 飛機場　航空站/『増訂総合英漢』1949 航空站。もっとも最近の中国では日本語をそのままとり入れる傾向があり，「空港」も中国語として使うことがあるし（賀国偉 2001『前衛詞話』p. 136 南京大学出版社），新語辞典（『現代漢語新詞語詞典』花城出版社 2000）にも出ている。“海港”や“空軍”“空戦”がある以上“空港”が入ってもおかしくはないわけだ。なお，韓国語には「空港」がそのまま入った。

注 19　沈 1994, p. 195。

補注 1

“雨脚”は『現代漢語詞典』（商務印書館 1996）に日本語の「雨足」の意味にあたる語釈をのせているが，中国人でもこの語を知っている人は少ない。

〈参考文献〉

荒川清秀 1981「中国語の語彙」『講座日本語学　対照研究 12』明治書院
荒川清秀 1986 a「現代日本語における漢字の意味」『日本語と中国語の対照研究』第 11 号
荒川清秀 1986 b「字音形態素の意味と造語力」『文学論叢』第 82・83 輯　愛知大学
荒川清秀 1987「訳語「熱帯」の起源をめぐって」『日本語学』2 月号
荒川清秀 1988「地理学用語「回帰線」の起源をめぐって」『国語学』155 集
荒川清秀 1997『近代日中学術用語の形成と伝播』白帝社
荒川清秀 1998「漢字の意味の歴史性――「盆地」考」『学鐙』95-3
荒川清秀 2000「「健康」の語源をめぐって」『文学・語学』第 166 号
輿水優 1987「シンポジウム　日本語と中国語の教育」『21 世紀への日中関係』所収。愛知大学
輿水優 1998「日本語と中国語」玉村文郎『新しい日本語学を学ぶ人のために』所収　世界思想社
沈国威 1990「「V＋N」構造の二字漢語名詞について」『国語学』160 集
沈国威 1994『近代日中語彙交流史』笠間書院
田村眞八郎・石毛直道編 1993『外食の文化』ドメス出版
陳力衛 2001『和製漢語の形成とその展開』汲古書院
野村雅昭 1978「接辞性字音語基の性格」『電子計算機による国語研究IX』秀英出版
橋本萬太郎他 1987『漢字民族の決断』大修館書店
黄金貴 1995『古代文化詞義集類弁考』上海教育出版社
王鳳陽 1993『古辞弁』吉林文史出版社
Takao Suzuki, 1963, The Semantic Analysis of the Present-Day Japanese, The Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies

〈資料〉袖珍 1862 →『英和対訳袖珍辞書』(秀山社復刻本)/地学字彙 1915 →『英和和英地学字彙』地学協会 (初版)/井上新英和 1915 →『井上新英和辞典』井上十吉/井上和英 1920 →『井上和英大辞典』/研究社英和 1935 →『研究社英和大辞典』/Morri 1822 → R. Morrison『中国語辞典　英華の部』/Lob 1866 → Lobscheid『英華字典』/Dooli 1872 → Doolittle 1872『英華萃林韻府』, Rozario, Marcal and Company/TECH 1904 → C. W. Mateer, Techinical Terms Shanghai Presbyterian Mission Press/顔 1908 →顔恵慶『英華大辞典』上海商務印書館/Hem 1916 → K. Hemeling『官話』Shanghai Department of the Inspectorate General of Customs/英華日用 1915 →『英華日用字典』商務印書館/HANDBOOK 1917 → Mateer, "HANDBOOK of NEWSPAPER"/NEW TERMS 1932 →"NEW TERMS for NEW IDEAS"/総合英漢 1927 →黄士復他『総合英漢大辞典』商務印書館/『双解実用』1935 →『双解実用英漢辞典』商務印書館/増訂総合英漢 1948 →黄士復他『増訂総合英漢大辞典』商務印書館

——愛知大学教授——

(2001 年 9 月 20 日　受理)